

Title	岡田譲著『□會人類學の基本問題』、石田英一郎著『文化人類學序説』、西村朝日太郎著『文化人類學論攷』
Sub Title	Y. Okada : Basic problems in social anthropology, E. Ishida : An introduction to cultural anthropology, A. Nishimura : Essays in cultural anthropology
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.7 (1960. 7) ,p.110- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600715-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岡田 謙著

『社會人類學の基本問題』

石田英一郎著

『文化人類學序説』

西村朝日太郎著

『文化人類學論攷』

はじめに

科學に國境はないといわれながら、社會科學の世界においては、種々の文化的社會的な特殊條件が重なりあつて、ときには國家や民族の枠にしばられ、それぞれ獨自の理論的様相をしめすことが多い。人類に共通する普遍性と、種々の國家や民族にあらわれる多様性とは、文化人類學にとり全人類的な視野から検討するに適わしい中心課題の一つであるが、人類學それ自體の領域においても、國家や民族が異なるにしたがいそれぞれ獨自の特徴をしめすことが多い。例えば、同じように文化と社會の問題をとりあつかいながら、アメリカでは文化人類學、イギリスでは社會人類學、ヨーロッパ大陸では民族學といったように、その學問上の名稱から性格にいたるまで、

それぞれの國家的な枠組が付きまといつて思われることがある。

このような事態は、たまたま、昨年度(昭和三十四年)九月以後に次々と出版された次の三つの著書にも顯著に反映しているように思われる。そこで本稿においては、それら三つの著書を同時に相互に比較検討することによつて、以上の問題を中心に若干の考察を加えたいと思う。

なお、各著書の發行所および發行期日は次のとおりであるが、各著書には、また、既發表の論文の再録されたものが多い。

社會人類學の基本問題(以下『基本問題』と稱す) 有斐閣、昭和三十四年九月二十五日發行

文化人類學序説(以下『序説』と稱す) 時潮社、昭和三十四年十月十五日發行

文化人類學論攷(以下『論攷』と稱す) 日本評論新社、昭和三十四年十二月二十九日發行

試みに、各著書の各論文を、(一)立場性、(二)基礎概念、(三)學說の紹介とその展開、(四)日本社會の問題、(五)民族誌學的研究の五つの問題別に分けると、おおよそ、次のような一覽表にしめすことができる。

次に、それらの五つの問題別に、各著書の各論文を紹介しながらそれぞれの著者がとりあげる問題點や、その性格上の共通する點と相違する點を指摘したいと思う。

著書	問題別	立場性	基礎概念	學說紹介とその展開	日本社會の問題	民族誌學的的研究
社會人類學の基本問題 (七編)	社會人類學の性格	文化の性格 (昭29)	文化の概念 (昭34)	親族集團 小地域社會 文化變動 (昭32) (昭34)	日本における同族研究の意義 (昭34)	アタイヤル族の社會構成 (昭24)
文化人類學序説 (七編)	文化人類學の目的と對象	文化人類學と人間學 文化學の形成 (昭32) (昭34) (昭26)	未開民族と原始文化 世界史と文化人類學 唯物史觀と文化人類學 人類學とヒューマニズム (昭34) (昭31) (昭34)	氏族制時代論 (昭32)		
文化人類學論攷 (九編)	人類學と人間學	民族學における民族主義と世界主義 ソワイエツト人類學界の近況 環境論の再吟味 (昭34) (昭25) (昭23)	日本文化の範圍 (昭23)	セイロン島の民族と文化 セラン島の社會組織 (昭30) (昭32)		

立場性

『基本問題』においては、社會と文化の解明に際し、かなり徹底したイギリス社會人類學上の立場が堅持されている。すでによく知られているように、この社會人類學の流れは、マリノフスキー、ラドクリフ・ブラウン、ファース等によつて代表され、人間行動を分析するための比較社會學、あるいは、未開社會に適用された社會學といわれているように、それとは別個の「文化を中心とした科學」すなわち、いわゆる文化人類學とは著しい對照をします。社會的歴史的事實の分析に當つて「社會」と「文化」のいずれの面から分析

を始めるかという點に、兩者の性格上の基本的な相違がみられるのであるが、その場合の「社會」と「文化」の概念規定の仕方に、實はこの問題に關する理論的核心がひそむものといつてよい。そしてこの點については、すでにイギリスのファースとアメリカのマードックとの間の有名な論争がある。前者は、主として文化よりも社會集團、人間關係の構造に關心をもち、歴史的關係よりも同時代的關係に興味をもつていると後者から指摘されたが、また後者は、社會集團を飛び越えた抽象的な「文化」という概念を自明のものとし文化と社會の兩概念を明確にすることなく、すべての社會的事實を文

化人類學の名のもとに難多に研究しようとしている、と前者から批判されたのである。

ところで、「文化」という概念に社會構造も集團もすべてを包含させてしまふか、又はこれと異つた次元のものと考えるかによつて、化人類學の名を採るか、社會人類學の名を好むかがきまつて來る」と『基本問題』の著者は述べながら、「私は社會を以つて文化の一部とせず、文化の擔手としての社會を取り上げ、集團的次元を強調した、イギリス社會人類學の功績を認め、この點を明瞭にする意味から、社會人類學の名を選び度いと思ふ」(一八頁)と、その立場性を明らかにしている。しかしながらその場合に、文化と社會の分類に關し著者は、別段、詳しく自己の見解をのべているわけではなく、最近のクローバーとパースンズの共同提案を紹介した「註」の個所で、「文化を人間行爲を形作つている要因としての價值・理念の類型・及びその他の象徴的意味體系」と考え、「社會(社會體系)の方は、個人及び集團間の特定の相互關係體系」と定義したらよいとのべ、さらに「一方を他方によつて説明してしまふのではなく、各々の次元に沿うて研究を續けると共に、兩者の關連を明らかにする方向に進むべきだ」と主張しているに止まる(傍點筆者二〇頁)。だから著者の立場性の取得は、著者の説明する限りでは、「特定の相互關係體系」の次元に注目する好みをもつ故に、社會人類學のそ

れに立つということにもなるといえよう。

ところで、社會と文化の經驗的な把握には、文化と社會の兩系を相互に獨立に分離することだけが必要なのではなく、兩系の相互の關係を現實に確認することが必要なのではないだろうか。さらにまた、この兩者の關連を明らかにする方向に進むべきだというのではなく、「價值・理念の類型」や「象徴的意味的體系」のすでに滲透しきつてゐる「相互關係體系」を如何に具體的に把握するか、が現實の緊急の課題になるのではないだろうか。もしそうだとすると、或は逆に、文化の相對的狀態よりの具體的分析のために、特定の相互關係體系の究明の場合にも、文化の次元の價值・理念の類型その他の象徴的意味體系の問題の優位性が主張されねばならないという議論が成立することになるのである。

ところで、『序論』においては、「全體としての人類文化の科學」と規定する化人類學の立場性が、問答の形式で展開されている(この論文の舊題は「文化人類學問答」として一九五七年に發表されている)。著者が人類文化を全體として把握するといふ場合の「全體」の意味には、「時間的にも空間的にも一つの連續した全體として見た文化」と、「それを構成する内容的諸要素の單なる總計ではなくして、一つの有機的統一的な全體としての文化」との二つの意味が同時にふくまれてゐる(三頁)。さらに「文化人類學は最初から、

どこまでも巨視的な科學で、その特徴は、つねにその當時の水準における全人類の見透しを背景とする點にある」のだから、「現實に、ある特定の民族なり文化内容なりが、ある學者の専門の研究對象となつていても、その研究が……他の文化との關連を意識してなされるならば、彼は文化人類學者とよばれうるであらう」(優點筆者七頁)とその立場性を具體的にしめしている。このような立場にたつと、イギリス社會人類學の立場は、また、次のように評價されることにもなる。社會人類學は、何故、とくに意識的に「文化」と區別した「社會」にその對象を限定しなければならぬか、という點を問題にとりあげ、「社會の構造的・機能的な研究が學問的に可能ならば、それと不可分の關係において、社會をも含めた文化の全體構造も、また重要な研究對象でなければならぬ」として、「ここにこそ、社會學と區別された文化人類學の固有の課題が存するのではなからうか」(九頁)と反問しているのである。

著者のこのような立場は、第一の時間的空間的全體性において巨視的な人類文化史とつながりをもち、第二の有機的・統合的全體性において人類文化に一般的プロセスとつながる。それは、また、歴史と科學、記述と分析を一個の學問體系に統合しようとする立場といつてもよい。そして、この二つの對立領域は、たがいに一方が他方を前提とする關係に立つことになり、「文化人類學は、人類文

化における反復的・普遍的な傾向率ないしは法則性を求める、その科學としての學問的課題を果すことにより、現在の文化ばかりでなく、先史時代をも、より一そう嚴密な基礎の上に解明できる立場にある」(一六頁)と考えられているのである。

ところで、文化人類學における歴史主義・相對主義と、分析主義・普遍化主義との、双方の對立的立場は長い期間の論争の原因となつていたが、著者のしめす「全體性」の構成には獨創的な見解が少なくない。そして、一般的指針としての巨視的な包容力をもつこの構成においては、具體的現實的な調査研究に際しての分析圖式にまで觸れるところがないのは當然であらうが、それでも、その點についての著者の構成の、高度の抽象性に難點のあることも否定できない。この點の具體的な展開は、主として、未開民族の原始文化や氏族時代論のような史的次元の問題としてとりあげられているが、それは、著者のこれまでの文化史的民族學の系譜の然らしむるところであるといつてしまえばそれ迄のことであるが、それ以外の、現時的點に定位した微視的問題の集約的分析にどのような具體的展開が期待されるか、その點の明らかにされることが希ましいように思われる。といふのは、さもなければ、多くの有益な示唆に富む、この壮大とまでいえるような巨視的な構成は、微視的な問題との接點を輕視することによつて、一片の文明批評か哲學的文化理論に墮

する危機があるからである。

『論攷』においては、人間考察の二つの立場を、「人間の本質の把握を志向する一つの人間學」と、「人間の徴象ないしは歴史の把握を志向する他の人間學」との二つを區別する點から出發している。

人間學と人類學との關係を明らかにするため、人類學の基本的性格を檢討しようとして英米的な見解(文化人類學的)、大陸系的な見解(形質人類學的)を極めて一般的な形で紹介しながら、前者を精神科學的、後者を自然科學的とみなし、「人間は精神と肉體との統合である以上、文化と形質との統一的關連において把握されねばならない」(傍點筆者二五頁) という立場をとる。このような「精神」と「肉體」の反律をめぐる古くからの哲學論争は、また、それぞれの限界科學を乗り越えるための層位的構造論克服の理論的基礎を量子生物學や精神身體醫學的な諸研究に求めることによつて、再檢討されようとしている。というのは、「機能的全體としての生物においては、肉體的なものと心的なものは完全に合一し、連續的全體的な活動過程として現われている」からに外ならないというのである。

だから「新しい人類學においては制御を求心的契機とする全體性の概念を當然原則的發見的な認識原理とみなすべきであらう」とし、「かかる認識原理に基いてこそ、始めて綜合人類學、肉體と精神の對立を超克した人類學の成立は可能となるであらう」(四三頁)と述

べている。いわば、自然人類學と文化人類學の統合點は、精神と肉體の對立を止揚するための生物學的Ⅱ發生學的Ⅱ生理學的基礎に求めることに代置され、その上に立つての「綜合人類學」の立場性を主張しているもののように理解されるのである。

ところでこの問題は、哲學的な本質把握の人間學を一方の極におき、徵表人間學としての人類學を他方の極においているが、形質人類學と文化人類學の對立が著者のいうように止揚できたとしても(この點については、人間の生物Ⅱ遺傳學的、本性[biogenetic nature]を全人類の不變の關連點[Invariant point of reference]として注目しだした最近の人類上の知見と若干の關連があるようにも考えられるが、それにしても、この對立がすでに止揚できたとは筆者にはとうてい理解できないのであるが)、そのことと、著者のいう綜合人類學としての「人間の**本質的不變者**を追求する人間學」と一體何の關係があるのか、著者の説明からは全く理解できないように思われる。

同じことは、「文化學の形成——榎瀨氏『文化人類學』の批判をかねて——」の論文についても指摘できる。そこでは、ホワイトの『文化の科學』に觸れながら「文化そのものの生成發展等に關する全般的な理論體系の建設を志向する文化人類學、乃至は文化學は、文化人類學の諸成果を整理、統合して次の發展に備えるために

も必要であらうと思う」(傍點筆者一三一頁)とのべ、棚瀬氏的前提書を主として文化學說と文化一般の理論的説明を意圖している點で文化人類學の原論ともいふべきものように解釋している。しかしながら、ホワイトの「文化科學」と後者の「文化人類學」が根本的に異なる立場にあることは人類學者の間においては自明の事柄であり、この點の混同にも理解に苦しむ點が多い。さらに、著者のいう「文化學」と前にのべられた「綜合人類學」とは、また、どのように關連づけられるのかも全く不明である。あるいは、『基本問題』や『序說』のように、それはそれなりに一つのハッキリした立場性をしめしている立場とは異つて、一定の明確な立場性をとらない立場をしめそうとする逆説的な立場性を『論攷』の著者は表明しているのだろうか。

基礎概念

『基本問題』においては、前にのべた著者の立場性を決定する「社會」と「文化」の兩次元の問題をとりあげ、その對比において文化の性格をやや詳しく論じている。「個人及び集團間の特定の相互關係體系」である「社會」は、ここでも「構造の面であり人間集團の面である」とされ、それに對し「文化」は「集團に支えられた、行爲の體系である」(傍點筆者七〇頁)と規定される。また別の個所で、

構造の面である「社會」に對し、いわば「社會的機能」としての「文化」の概念を考えているらしいフシがある(七〇頁)。さらに「文化は幾つかの面あるいは相に分れ……それらの文化の諸相は社會的機能とも呼ぶことができ……、互に關連し合い適應し合つて統一的全體を作り上げている」(八三頁)とのべ、それら「文化諸相の相互適應、相互關連に關して、そこに一定の法則を見出す」(八四頁)ことができるように肯定している。そうすると、ここでは、すでに、社會體系と呼ばれたもの、すなわち、個人及び集團間の特定の相互關係體系(二〇頁)が、構造の面(社會)と機能の面(文化)に分裂してしまつていことになるのであろうか。

このように考えて來ると、文化の擔い手としての社會を取り上げ、集團的次元を特に強調する社會人類學の立場ですら、右に述べられた文化の次元の諸相の重要性は輕視できない筈であり、著者も、事實、「社會人類學は社會的事實を分析するに當つて社會と文化の兩次元を考えている」(七〇頁)と主張するが、「各々の次元に沿つて」研究を續けると前に主張したことすらすでに不可能に近いことになりはしないであらうか。まして「各々の次元に沿つて研究を續けると共に、兩者の關連を明らかにする、方向に進むべきだ」(二〇頁)という提案は、事實上、無意味に等しいことになりはしないであらうか。さらにいえば、「擔い手」としての社會や集團の次元を特

に強調することよりも、「何を擔つているか」の文化の次元を強調することにもつと意味があるといえないだろうか。少なくとも、そこで示された「文化の性格」の章では、有名なクラックホーンとクローバー共同執筆の論文「文化概念」の紹介以外に、著者自身の立場をさらに明確にする基本點が明らかにされたようには考えられないのである。むしろ、アメリカの文化人類學者による文化概念の論議を紹介することによつて、五年以前の論文「社會人類學の性格」に表明されたその立場性は、かえつて混亂したように見受けられる。

ところで『序説』においては、文化の概念につき、本書の發行と同時に新しく發表されたかなり詳細な論文が収録されている。「文化」ということば(第一節)のもつさまざまな意味を古今東西にわたつて解説し、今日の人類學でいう文化の概念を明確に限定しようとする。アメリカの人類學者の間における文化概念の規定には、かなり長い間の重要な論争過程がみられるが、それらを適切に紹介、批判しながら「文化の實在性」(第二節)を明瞭に指摘していく。強靱な論理に支えられたその説得力ある論據には注目すべきものが多い。單なる外國學者の學說紹介以上に獨創的なものが多い。「文化の客觀的實在性こそが、まず文化の科學的認識の基本的前提をなすものであり……これを否定しては文化人類學は成立しえない」(三八頁)というのが、その終始一貫した基本的立場であるといえよう。

さらに「文化の起源と形成」(第三節)において、文化の起源を探究する際の人類の起源そのものの探究にまでさかのぼらねばならない必然性を指摘し、他の生物と區別される人類独自の様相を、言語という媒體によつて蓄積された經驗の三つの領域——技術・感情・意志——のそれぞれの過程について説明する。そして、それら「文化の内容と組織」(第四節)は、文化の構造的理解のために、文化の内容または項目を技術と價値の兩面にわたる意志・行爲・物體の三領域に分類されねばならないと主張する。さらに、技術の文化と價値の文化の兩者にまたがつて、この兩者を統合する役割をはたしている「社會」と「言語」の二つの文化の範疇をその圖式の中央にすえようとする。つまり「文化を構成する、技術と價値、社會と言語という四つの範疇を結ぶ不斷の相互關係」(五二頁)から、文化の全體組織を圖式化しようとしているのである。そうすると、「文化における全體」(第五節)は、これらの範疇が一定の相互關係において相補足し合つていることを意味し、この一定の相關關係の平衡狀態の推移から文化變化の理論が誘導されることにもなる。このような考え方は、また「文化と有機界」(第六節)において、文化の現象は文化のチームにおいてのみ正當に説明しようという「文化は文化から」の立場に通じるものとして説明される。さらに文化のチームにおいて人類文化史や文化の運動法則を探らうとする「文化と天才」(第七

節)の論議も、この方針の一つの展開と考えられる。つまり「文化の定義」(第八節)は、要約するに、(一)文化を無機界および有機界から區別する特質、(二)人間を人間以外の動物界から區別する標識としての特質の二つの點に集約されているものと解されるのである(七七頁)。

ところで、全人類的な見透しを背景にもつ巨視的な科學としての、著者のイメージにあつた文化人類學の構圖は、その論文(文化人類學問答)の發表後二年にして、技術・價值・社會・言語の四つの範疇分類によるやや具體的な展開をみたわけである。そこには、檢討に價する多くの重要な問題點がみられるが、著者のいう「後日の文化論のための序説的覺え書」以上のものがくみとられるものと考えられる。

しかしながら、重要なポイントになる四つの範疇について疑義がないわけではない。例えば、四つの範疇の操作的な性格とその意義について理解し得たとしても、そのうちの「社會」の概念によつて著者は何を意味しようとしているのか、その點、不明確なまま放置されているように考えられる。社會あるいは社會關係あるいは社會成員相互の關係ということばで、人間と人間の單位的結合を意味することからはじまり、「社會もまた言語と同様に、ある程度までそれ自體の構造の中に自律的な運動法則をもつことが證明されよう」と

しているが、文化の全體構造との關係においては、社會も言語も、むしろ技術と價值の両面に對應しつゝ、この兩者を一個の組織に統合する役割を演じている……(五九頁・六〇頁)というように、人間の具體的集團としての結合單位としてだけでなく、むしろ、價值と技術の統合的關係を擔う、その擔い手としての機能の面を意味している場合も考えられる。さらにこの論文の三年以前に發表された「唯物史觀と文化人類學」のなかの「社會について」の項目において、「相互關係にある個體の構成する社會集團それ自體は、人類にのみ特有のものではない。それは人類が人類にのみ特有な文化を形成するための缺くことのできない一つの基礎的な條件となつたものであるが、その存在は、文化以前すなわち人類以前の段階にたつたものである(傍點筆者一八一頁)とのべ、社會構造それ自體の自律的な汎時的な運動法則があるとすれば、「その法則性の根據は、文化以前の次元における生物としての普遍的な人間生活の中に横たわつていゝるのではあるまいか(傍點筆者一八一頁)とのべている。

相互に關係する個人の集團としての社會そのものは、「むしろ純粹社會」の意味において、これを文化の概念から區別し、人類文化の全體構造の骨格ないし循環系統としてのその機能を檢討せられるべきものであろう(傍點筆者一八二頁)とのべている。このような著者の考え方の遍歴から推測するに、社會ということばは、つまり、

生物としての人間のムレ（コンミニュニティー）以外の何ものでもないことになるのであろうか。そして、この單なる生物學的なムレが價值と技術の統合的關係を擔うということは、文化の次元の分析において果してどれだけの重要な意義を擔うものであるか、その點、理解に苦しむところがないわけではない。

文化の意義については、『論攷』においても別の視角からとりあげられている。人間の社會が動物の社會から區別されるのは一にかかつて象徴體系の有無にあるという大前提から、人類の象徴化機能は大脳生理の解剖學的根據に求めようとする立場をとつてゐる。そのことの原理的な妥當性は承認されるとしても、大脳皮質の解剖學的知見は、その專攻領域においてすらいまだ多くの未發見の分野を残してゐるにもかかわらず、その専門家でもない一民族學者たる著者によつて大膽不敵な臆説におきかえられ、「勿論かかる見解は、到底今日の科學に於て實證出来るものではなく、純粹に作業假説の範圍を出ないものであるが、もしかかゝる臆説が受容されるとすれば……文化相對主義の解剖學的根據も、民族と人種の交叉點もこのあたりに見出されるように思われるのであるが……云々」といつた鬼面人を感ず式の論議に出くわすにいたつては、讀者は唯々あきれるの外はない。その論法でゆくと、狹義の文化と著者が説明する「民族文化」は脳の視床部に、技術、物質文明は大脳の皮質部に、それぞ

れの解剖學的座をもつと主張するようにもなる（二四頁）。その場合の文化と文明の定義づけも曖昧であり、それに輪をかけて大難把大な大脳生理學的知識を無造作にもち出す點に、著者の科學者としての見解が疑われるものといわねばならないであらう。

學說紹介とその展開

『基本問題』においては、社會の集團的次元、構造の面を強調する立場性からして、社會集團の基本的單位としての全人類的な普遍性をもち、また社會人類學の領域の重要課題の一つともなつてゐる「親族集團」に關して、その詳細なタリミノロジーをとりあげてゐるのは、別段奇とするに足りないであらう。しかしながら、主としてラドクリフ・ブラウン、マードックの二人の著名な學者の所説を中心とするこれまでのタリミノロジーの紹介には、紹介以上の新しい觀點は見當らないようである。紹介といへば、次の「小地域社會」の論文こそ、レッドフィールドの「農民社會と文化」および「小地域社會」の二つの著作の丹念な紹介そのままであることには驚かされる。外國文獻をいち早く紹介する論文は、それはそれなりに意味のあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土に植附けるための、その準備と心構えが必要なることを認識した上でのことではなければならないであらう。ハースコヴィッチの「文化焦點

説」の紹介を中心とした「文化變動」の論文についても、その點、同じことがいえるであろうと思う。

しかしながら、紹介を中心としたものとはいえ、親族集團から小地域社會、文化變動へと視點を擴大していく著者の意欲的な活動には、注目すべきものが多いと考えられる。

『序説』においては、巨視的な「人類文化の科學」の樹立を目指すその立場性からして、「未開民族と原始文化」における遊動採取狩獵民、定住採取狩獵民、塊莖栽培民、穀物栽培民、遊牧民族の各々の生活の民族誌學的資料の配列や、「氏族制時代論」における歴史的復原の根據としての現在民族學の水準と狀況を問題としているのは、けだし當然の成行といえよう。文化史的民族學の系譜につながる著者の關心は、さらに「世界史と文化人類學」の論文において、歴史學と文化人類學の對決、その接點、および兩者の統合的研究の必要性に向つている。歴史の記述と文化の分析は、互に他を前提とし相互に規定し合う關係にあるという觀點から、世界史的な連續的全體、つまり、先史―歴史―世界史、の各段階にたいする文化人類學の發言とその意義とを組織的にとりあげ、また、文化人類學の側におけるこれまでの歴史的關心（文化史的研究）と現在の關心（機能主義的研究）との對置をめぐる論議をとりあげようとしている。人類文化の全體像のもとにおいては、歴史的と現在的とを區別す

ること自體が無意味であるという。というのは、歴史的過程と切り離し得ない文化の一般的研究プロセスの究明を目的とする現在の研究は、當然、歴史的過程の研究を問題としなければならぬからである。著者の最近の思索の奈邊にあるかが伺われて興味深いものが多い。それほど、この現在のと歴史的の對置の問題は、かつて、わが國の民族學界、人類學界の論議をよんだものであつた。

ところで、著者の綜合的視點は、さらに文化の構造と人間性の問題をめぐる「唯物史觀と文化人類學」、「人類學とヒューマニズム」の二つの論文において、現代文明の危機と不安をとりあげる文明批評にまで發展する。人類學者が文明批評や哲學的文化理論に手を染めるべきではないという論議もあるが、それに對して著者は「……だが、およそ本格的な學問に取り組む學者が、自己の専門とする科學が科學として成立しうる根據について反省しないでおられるものであろうか」（四頁）とその立場を明白にする。そして、その場合の著者の反省は、「人間が人間であることにもつく普通の共通性が、全人類史を通じて、その根底に横たわつてゐることを前提とする」（一七二頁）人間觀、歴史觀にもとづいてゐるようである。つまり、ホモ・サピエンスとしての人類の立場、ヒューマンなるもの、あるいは「人間性」そのものの存在を假定しその存在の實在を確信してそこから普遍的な人類の發展進歩の方向を探らうとするのである。

このような考え方は、また、著者の意味する「ヒューマニズム」の考え方と一致するものであり、その基盤としての人類における普遍性、すなわち「人間性」の存在を根拠としているのである。

しかしながら、「人間性」をめぐる人類學上の論議には、生物Ⅱ遺傳的な純粹に生理Ⅱ心理的なプロセスの全人類の同一様性を認める以上に、それから派生するもろもろの文化的次元の現象にまでその同一様性を擴大すべきか否かで、鋭い意見の対立がみられる。(この點については、拙稿「文化人類學における比較研究の方法について」法學研究第三〇卷第一〇號、昭和三十二年六月を参照されし。)

とくに、人類に普通の價值規準が實證されない限り、これまでの文化の相對性理論を中心とする問題を、人間性の存在を假定することによつて克服することは難かしいように考えられるが、この點について著者は、次のような表現をやや暗中摸索の型で用いている。

「……もし文化があくまで相對的なものとなれば、人類に普通の價值の規準というものもなければ、またおよそ異民族同士が相互に理解し共感しうるための、共通の公分母的な基盤も存在しえないことにならないだろうか。」(一八八頁)

「……いかなる社會集團もその秩序を保持するための規範を有し反社會的行爲に對する制裁の手段をもつ。……このような規範を拂つてゆけば、人類に普通の價值を實證しうるかと思われる。」

(一八九頁)

「倫理的規範ばかりでなく、論理の型式や美的價值の判定においてもまた、あらゆる民族に共通した規準の存在することが實驗的に證明されようとしている。」(一八九頁)

「われわれが、たとえばすぐれた藝術作品や世界的な古典に對し時代を超え、民族を超えた共感をよびさまされるという事實も、このような人類普通の生活感情——究極的には人間性——に根ざしたものではあるまいか。」(一八九頁)

「科學的にその存在を證明された人間性の解放こそは、少くとも現代世界にあつて、すべての人類の承認を求めうる、普遍妥當的な、歴史における客觀的な進歩の方向を意味するものと信じる。」(一九四—五頁)

「私が先に、『少なくとも現代世界にあつて』すべての人類の承認を求めうる普遍妥當的な進歩の規準として提唱した人間性の解放への方向なるものも、たとえば過去數千年にわたるあらゆる文化に、價值評價の規準として事實上認められていたとは云えない。

以上のような意味では、價值に關するかぎり、文化の相對性理論はどこまでも正しいであろう。」(一九六頁)

「人間性に先んじて善惡の存在するものではなく、善惡の最大公約數的な規準をなすものが、すなわち人間性に外ならない……

以上のような文章に表現される断片的な内容から、果して生物Ⅱ遺傳的、生理Ⅱ心理的プロセスの一樣性以外の文化の次元における具體的な人類の一樣性を確認することができるであろうか。つまり、文化の相對性理論を克服するに充分な根據をそれらの文章から發見出来るであろうか、その點が問題なのである。もし、人間性の存在を科學上の操作として假定するならば、人間性の存在を「要請」として前置する立場は、その非存在を「要請」として前置する立場と、同様の相對的な意味しかもたないのではないだろうか。その意味で、人間性とは何かについての著者の立場からの究明は、すでに充分に成功しているとは考えられないようである。勿論、著者のいうように「現代のように異文化間の國際的交流の進んだ時代においては、人類が自己を起りうべき破局から救うためにも、すべての人間の承認を求めうる何らかの普遍的價値の規準を見出すことは、必要でもあれば可能でもあると考える」(傍點筆者一九六頁)という點について、その必要性をだれしもが認めないわけではない。しかし、それが可能であるための根據に人間性の存在を規定することは、當爲と存在を混同する科學上の論理の飛躍であることを認めねばならないであろう。

問題は、むしろ、現代の諸民族や諸國家が長期にわたる内部の闘

争と融合の過程から成立したように、現代の人類における價値の相對性も、長期にわたるこれからの全人類的文化的接觸の過程をへ、相互のなしくずしの融合の過程をへて克服されるという點にあるのではないだろうか。たとえ、その間に一時的な葛藤・闘争の過程がみられたとしても、歴史的な時間の長さにおいてそうなるのではなからうか。しかもその場合、個々の人間の相對的價値規範が國家という枠のなかで承認されているように、個々の文化の相對的價値規準も人類という世界共同體の枠のなかで承認される方向に進むものと考えてよい。つまり、實證されざる普遍適當的な人間性の存在を前置するよりも、現代文明の激烈な交流過程に芽えつつある、その新しい共通な何かを發見しようとする科學者の努力にこそ、文化人類學の學問としての意味があるのではないだろうか。その點に、哲學的な文明批評と科學的な文明分析の分岐點があるように思われる。

ところで、『論攷』においては、マルキシズムの哲學に立脚する「ソヴィエット人類學界の近況」および「民族學における民族主義と世界主義——ポチェーヒンの理論を中心として——」の二つの論文が収録されているが、この方面の事情に暗いわが國の人類學界に對し、右の二つの論文は貴重な紹介の勞を果しているものといえよう。ソヴィエット人類學における民族學、民族誌學、考古學その他

の學問體系、その政治的立場性、問題領域、その研究成果等、最近の状況を理解するに極めて便利である。

以上の二編の外に、「環境論の再吟味」の論文も収録されているが、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化人類學の領域においては、別段、新しく問題とするほどの内容がもられてはいるわけではない。むしろ、環境論に關するスチニューワードその他の最近の業績に觸れるところがなく、その資料の古さからいっても、また断片的な紹介に終つている點からしても、果して著者がいうように後進の學徒にたいし再録の意義があつたかどうか、すこぶる疑問であるように思われる。

日本社會の問題

文化と社會の比較研究をめざす人類學の基本方針からして、わが國の人類學者が日本の文化と社會に非常な關心を拂つてゐるのは、ここに改めて指摘するまでもない。しかしながらその場合でも、それぞれの立場性からする種々の研究方針がとられてゐることも、また事實として認められるところである。

『基本問題』においては、いうまでもなく社會の構造面に重點をおくその立場性から、「日本社會の基礎的構造」といふべき同族」についての研究が、日本社會の構造分析のために不可欠のものである

とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會學者の間でとりあげてきたが、それらの同族研究についての學史的評價に觸れ、その上に立つて、同族のもつ社會的機能を、(一)經濟的共同、(二)地域的共同、(三)宗教的共同、(四)冠婚葬祭における共同、の以上四つの共同事項の面から検討している。さらに、同族組織と密接な關連をもつ親分子分關係にも觸れ、「本家の分家に對する保護、分家の本家に對する奉仕の關係が、同族と同族の間、個人と個人との間の關係に擴大されたものが、親分・子分關係であつて、保護奉仕關係、相互扶助の關係の基本的な構造は兩者に共通である」(六八頁)と結んでゐる。機能主義に立つ社會人類學の方法を利用した同族研究の目的と意義は、この論文から充分に妥當に理解され、評價されうるものと考えられる。

一方、『序説』の方においては、すでに「河童駟引考」(一九四八年)、「桃太郎の母」(一九五六年)を發表した著者の文化史的民族學の立場、あるいは「世界史と文化人類學」に組織的に展開された著者自身の立場から、日本古代の氏族制度——わが國の建國と紀元をめぐる問題——についての再検討を試みてゐる。その人類文化史的な廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壊を多くの民族誌學的資料から跡づけ、さらにモルガンがかつて指摘した歴史的記録に残るギリシヤ、ローマ、ケルト人、ゲルマン人、アステカ

族、インカ、中國の各氏族制度の問題を再びとりあげ、さらに、日本古代社會の發展段階に關する諸解釋に關し、「個人の血縁集團を結合原理については、文化により、多種多様の形式がありえたものと推定するはかなく、母系社會から父系社會へという單純な一線の進化の系列や、氏族共同體の中では、家族の機能も存在もありえなかつたという所説などは、とうていこれを肯定することができない」(一四六頁)といった具合に、現在の民族學の水準からする歴史學への寄與と、その目的、意義、限界等を論じている。歴史的復原の根據としての現在民族學の水準と狀況、および歴史學と人類學の統合研究の必要性を強調する、その具體的な一例として興味深いものが多いといえよう。

『論攷』においては、著者のいう「下からの人間學」としての人類學の立場から、文化人類學諸學派の方法を簡単に紹介、批判しながらベネディクト女史の「菊と刀」、エムブリーの「須惠村」の兩者の見解を比較しつつ、日本文化の範型をめぐる基本的な問題をとらあつかつてゐる。この問題は、かつてわが國のその方面の専門學者の間で種々の論議をよんだことがあるが、著者は著者自身の立場から再びこの問題をとらあげてゐる。しかし、この論文は人類學の専門誌以外のものに發表されたものでもあり、著者の方法的探索は簡略に過ぎ充分に理解されない點が多い。

民族誌學的研究

『基本問題』において臺灣の「アタイヤル族の社會構成」、「論攷」においては「セイロン島の民族と文化」および「東部インドネシアにおけるセラン島の社會組織」、がそれぞれ収録されている。前者は、著者自身の手になる現地調査を主體とし、家族、親族集團、祭祀團體、共食團體、土地共同所有體、番社及び番族連合の各集團のレヴエールにおける精密な記述と分析をとまなう、社會組織全般の問題をとりあげた貴重な資料として高く評價されている。後者は、主として各國の文獻資料を中心に、それぞれの民族、種族に關する詳細な民族誌學的研究をとりあげており、この方面の研究者にとつては、同様に得難い貴重な資料となるものと考えられよう。

おわりに

人間の社會と文化を解明する努力は、人類學に限らず人文科學、社會科學の全般にわたつてくりひろげられ、これからもまたくりひろげられるものと考えられるが、それぞれの解明に際しての基本的方針に如何に多くの多様性がみられるかは、かえつて、このような努力の如何に困難が伴うかを物語る、何よりも雄辯な證據の一つと考えられる。こと人類學の領域に限つてみても、いままでに考察し

てきたように、決して単一の平板な道歩んでいくわけではない。

『基本問題』の著者は、イギリス社會人類學の立場に近くわが國社會學界においても主要な地位をしめ、著者自身もいうように「社會學の畑に育つた著者の社會人類學觀には、何といつても社會學的偏りが抜けないであろう」(傍點筆者二頁)と考えられる。その意味で、その文化と社會の解明の方法に、社會學と社會人類學との兩者の間の限界領域的特殊性がみられるのである。

それに反し『序説』の著者は、戦前からのウイン學派に屬する文化史的民族學に深い造詣をしめし、戦後はアメリカ文化人類學の意欲的な攝取・統合を試みているが、「……まだ若い新しい、いわば生成期にある科學の中には、さまざまの學者が、その性格についてさまざまの異つた見解を抱いている」、そのような新しい科學の一つである文化人類學という専門分野についての、著者自身の一つのイメージをそこに描こうとしている。「全體としての人類文化の科學」と規定された文化人類學のあり方に對する著者個人の理想像では、「現代におけるこの學問の中心的な諸課題とその解釋の方向」をできるだけ體系立てて説明できるように、努力が拂われているのである。さらに、「人類學は、人間とは何かという、古來の哲學者の根本課題を引きついだ綜合科學ではあるまいか」(四頁)という目的意識が、つねにこの著者の背後にひそんでいるといつてよい。著者の

このような理想像は、すでにウイン學派、アメリカ學派といった國境にこだわるところのない國際的な視野のもとから生まれたものといつても決していいすぎではないであらう。

『論攷』の著者は、「私は文化人類學專攻の一學徒としての久しきにわたる研究活動の成果を集成し、『人類學的文化像』と題して、不遠、上梓する豫定であるが、本書はそれにもれた若干の論文を一巻の書物に纏め上げたものであり、一部は専門の雜誌に、一部は綜合雜誌に發表したもので、いささか學俗混淆の嫌いがあるが……」(二―三頁)とことわつていように、この著書の斷片的な諸論文から理解しようとする限りにおいては、その著者の意圖ははなはだ誤解され易い危険に陥るかも知れない。しかし、量子生物學や大脳生理學上の知見に著者のいう「綜合人類學」の接點を求めようとする傾向は、別の意味で、いままさら新奇な試みではないとしても注目に價する方向の一つであるといえよう。

同じ文化人類學あるいは社會人類學の名稱のもとに、これほどの種々さまざまの考え方が成り立つということは、一見、奇異に感じられるかも知れないが、『序説』の著者もいふように、「それぞれ自らのイメージを、これらの名を冠した學問の對象や目標に對して描くのは、各學者の自由である」(一頁)ことは間違ひなく、「なにも偏狭なのれんや繩張りの意識から、自己のそれと異なる學問名稱の

用い方を目的の敵にして妨害を試みなくても、堂々と所信を披瀝し合う百家争鳴のうちに、學界の公正な良識は、おのずからその歸するところを知るであらう」(二頁)という科學者としての見識のうち、この幼ない生成熟期にある文化人類學の將來の發展が約束されるものと考えられる。事實、『基本問題』の著者にしても、あるいは『序説』の著者にしても、それぞれの所信を相互に披瀝し合うその討

論の過程において、戦後十年間におのずから相互に歩み寄つてきた實績が指摘されよう。

本稿で三つの著書を相互に比較しそれらを概観したことの意義が、その意味でも生かされることにならうと思われるのである。

(十時殿周)